

令和3年度 全日制課程 学校経営報告

東京都立青梅総合高等学校長
鈴木 信也

今年度の取組と自己評価

【 新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、コロナ禍における教育活動を一層の工夫で実践できた。 】

(1) 教育活動の目標と方策

① 学習指導（各教科・科目における「考えさせる授業」の定着）

- ア グランドデザインである青総スキルの活用等により「考えさせる授業」を一層推進した。
- イ 授業外学習時間の増加を図るため、各教科が工夫した授業展開を推進した。
- ウ 学習状況と成績の推移を分析して、生徒の課題解決意欲を引き出す授業を推進した。
- エ 教科の枠を超えた相互授業見学や学校の枠を超えた研究授業参加等から、そこで得られた改善点を生徒に還元することで、教員相互の授業力の一層の向上を図った。
- オ 個別面談指導を充実させ、「自分をつくる、自分の未来」を合言葉に、自分の未来を創造する意欲を身につかせ、生徒に進路実現を目指させた。
- カ オンライン個別学習を取り入れた学力の着実な定着を図った。
- キ 高大接続改革は具体的推進ができなかった。

(自己評価) 考えさせる授業の定着について、教員は意識下において工夫した結果、課題解決能力やプレゼンテーション能力の向上につながった。アンケートで100%の教員が考えさせる授業を実践しているという肯定的回答に対して、生徒は85%で昨年より7ポイント上昇している（一昨年は65%、昨年は77%）。「考えさせる授業」の定着が進路実現に繋がり、生徒がより高い目標に挑戦しようとする意欲に現れた。オンライン授業やハイブリッド授業等、コロナ禍でも学習意欲を維持・向上させる取組がスムーズにできたが、実技・実習教科の多い本校にあって、オンライン授業の取り組み方が課題である。

② 進路指導（針路指導という意識の両立）

- ア 「自分をつくる、自分の未来」を実現させる指導の充実を図った。
- イ ライフプランに応じた科目選択が適切にできるよう指導し、将来を見通した視野と自己肯定感や自己有用感を育みながら、希望進路実現に向け針路選択力の向上を図った。
- ウ 担当年次教科教員が全員参加しての模試等の結果に基づく分析会は実施できなかったが、教科で学力向上の対応策を検討し改善した。
- エ 進路指導部が主導できず、Classi等を活用した指導は推進できなかった。

(自己評価) 「進路」を「針路」と置き換えて指導し、「自分をつくる、自分の未来」を強調する進路指導を推進した結果、国公立2名、早慶各1名の進路決定者等、チャレンジ精神を発揮し合格を勝ち取る生徒の育成につながった。学力向上の一環として、反省に基づき来年度はClassiからスタディーサプリ（リクルート）に変更するが、その効果的な活用が課題である。

③ 生活指導・安全指導（規律ある学校生活の一層の推進）

- ア 生徒が自ら誇りをもって、主体的に本校の生活規律を守る態度の育成を推進した。
- イ いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組むため、学校いじめ防止対策委員会機能や学校カウ

ンセリング機能を充実させ、学校全体で情報共有し、いじめ総合対策に基づいた対応をより推進した。
ウ 校内研修を通して教職員同士が体罰に対して相互に看過しない体制づくりを推進した。
エ 青梅総合SNSルールについて、生徒会を中心に検討し生徒へ周知していく環境を整備した。
(自己評価) 校則の見直しを年度当初から始め、生徒を代表する生徒会の意見・要望を考慮し、今の本校に必要な校則に改正した結果、自ら誇りを持つ生活規律に近づけたが、今後も生徒に考えさせる機会を設け生徒によるより実質的な校則を目指すことが課題である。カウンセリングマインド向上のための研修を実施したことで、若手教員の相談等に対する対応能力が向上し、精神的に起因する事故や事件の未然防止に繋がった。

④ 特別活動・部活動（コロナ禍におけるガイドラインに沿った活動の推進）

ア 各行事は、感染予防策と時間管理等を徹底した上で、生徒の達成感を高める工夫を図った。
イ 事前指導により、実行委員が自らの判断で動けるような自律的な行動力を育んだ。
ウ 体罰や不適切な言動のない指導を前提に、卒業後も活動を前向きに生かす意思を育む、生徒が主役の部活動づくりを一層推進した。
エ スポーツ特別強化校（剣道部）、スポーツ特別準強化部（陸上競技部）の指定を受け、運動部・文化部ともに相乗作用として部活動の活性化をより推進した。
オ 「夢・未来プロジェクト」を通じたオリンピック・パラリンピックへの機運を維持させ、積極的に2020大会に関わる意識の向上を育んだ。
カ 「世界ともだちプロジェクト」では姉妹校交流推進校としてドイツとの交流を実施するとともにサブカテゴリー国との交流も推進し、国際交流のレガシー構築を推進した。
キ 日本の伝統・文化を発信する能力・態度の育成事業推進校としての施策を生かし、日本の伝統文化の発信を重視し、オリンピック・パラリンピック教育を推進した。
ク TOKYO GLOBAL GATEWAY 事業を活用したグローバル人材育成を、1・2年次全員参加で実施を継続した。
(自己評価) コロナ禍でも感染症対策を万全に工夫して学校行事を開催した結果、生徒にメリハリのある学校生活を送らせることができた。学校全体が元気になった。スポーツ特別強化指定の剣道部は、制限のある活動の中で、強豪私立校を破って関東大会出場を果たした。そのことが多くの部活動に波及し、時間効率の良い効果的な練習の推進に繋がった。オリパラのレガシーとして国際交流意識が定着し、生徒一人ひとりが強い興味・関心を抱いたが、海外の交流が時差や世情で困難となっていることが課題であり、同時双方向以外の国際交流を図ることを推進していく。

⑤ 心身の健康づくり（健康生活への組織的対応の推進）

ア 校内分掌の保健部を保健相談部と名称変更し、相談業務の見える化を推進した。
イ 教員の受容的態度を基本に日常的に生徒の状況を把握し、全教員が必要な情報を共有するとともに、各学期初めには生徒の状況確認を確実にを行い、心身の健康づくりと早期ケアを一層充実させた。
ウ 配置されているスクールカウンセラーを活用した校内研修等を通じて、学校の相談体制・教員のカウンセリングマインドの向上を推進した。
エ 特別な支援が必要な生徒への共通理解と組織的な対応を推進するため、特別支援コーディネーターを2名体制にして特別支援教育を推進し、個別案件に丁寧に対応させた。
オ 「アクティブプラン to 2020」に基づいて体力向上を図り、心身の健康づくりを一層推進した。
カ 自他の生命の大切さを実感させる取り組みを推進するため、組織的な相談体制を充実させ、生徒の心身の悩みに対応するとともにいじめ撲滅を強く推進した。
(自己評価) 今年度も生徒の精神的ケアが重要となり、保健相談部が必要な情報共有や見える化（ホワイトボードや掲示板等の活用）を教員に図ったことで、生徒に対する組織的な対応が一層推進できた。SCによる研

修会やリアルな情報を基にしたケース会議で、教員はカウンセリングマインドを向上させた。体力向上については、コロナ禍での実施方法に課題を残している。

⑥ 募集広報活動（情報発信・提供の強化と地域連携）

- ア ツイッターやホームページの随時更新により、本校の教育活動をタイムリーに発信し、中学生やその保護者、地域の方々の本校に対する興味・関心の向上を図った。
- イ 個性ある総合学科として、その取り組みや成果の「見える化」をより推進する情報を推進した。
- ウ 近隣中学校と連携を図り、中学校教員や中学生保護者の総合学科理解を一層推進した。
- エ 学校説明会や合同説明会等において本校理解を推進するため、効果的で印象的な広報手段を検討し、期待に応える総合学科としてアピールした。

（自己評価）ホームページの随時更新は370回以上である。近隣の中学校との連携では、校長として青梅市立中学校長会に出席し本校理解の推進し、青梅線沿線の中学校進路指導連絡会の会場依頼を受けて本校が提供し、その際に本校の教育活動や進路実績等についてプレゼンテーションを行った。学校説明会や合同説明会では予定した参加人数を上回った。しかし、今年度の一次検査では大幅な応募人数の減少があり、この分析と新たな広報活動が課題である。

⑦ 学校経営・学校運営（連携と育成、体制の確立）

- ア 西部学校支援センター支所との連携を密にし、職務の効率化を図り学校経営の基盤をより強化した。
- イ OJT を活用して各職層の人材育成を図り、課題解決に取り組む活気ある校内体制を推進した。
- ウ 生徒や保護者、地域住民からのアンケートに基づいた「期待に応える学校づくり」を推進した。
- エ 管理職が率先して「ライフ・ワーク・バランス」を示し、全教職員の働き方改革を一層推進した。

（自己評価）主任教諭選考に応募する教諭にとって、センターの出前セミナーの活用は効果的であり、今年度は2名の合格者を出した。今後も連携を深めていく。課題は、人材発掘・育成を行い期待に応える学校づくりを推進していくことにある。

（2）次年度以降の課題と対応策

- ① スクールミッションの周知 スクールミッション・ポリシーを多面的に発信する。
- ② 「やり抜く力」を身に付けさせる学校運営 教科指導に留まらず全校的展開としていく。
- ③ 「考えさせる授業」の一層の推進 「考えさせる」指導内容・方法の工夫と教科横断的研修。
- ④ 「自分でつくる、自分の未来」の実現 プレゼンテーション能力向上を図りアピール能力を高める。
- ⑤ 読書活動の一層の推進 授業やHR等も含めた教育活動全体で図書館の意図的活用を推進する。
- ⑥ 総合学科としての本校アピール 授業内容・進路実績等の教育活動を背景に、近隣市町村の中学校教員や生徒・その保護者に、普通科との違いを明確アピールする。

令和3年度の数値目標と実績

数値目標	令和3年度 数値目標	令和3年度 実績
① 進路決定率	100%	100%
② 進路決定満足度	100%	93%
③ 特色ある大学等合格者数 ア 農業系大学合格者 イ 看護系大学等合格者	ア 10名 イ 希望者全員合格	ウ 13名 エ 全員合格(36名)
④ 資格取得 ア 英語四技能(GTEC:GRADE4) イ 英語検定準2級以上 ウ 漢字検定準2級以上 エ 情報処理検定各種2つ以上合格 オ 農業関係資格検定 カ 秘書実務検定(講座選択で受検)	ア 60名 イ 100名 ウ 45名 エ 講座選択者全員合格 オ 新規目標 カ 15名	ア 121名 イ 89名 ウ 22名 エ 全員合格(24名) オ 1名 カ 15名
⑤ 部活動加入率	90%	91%
⑥ ツイッター・ホームページ 更新数	350回	360回
⑦ 図書館貸出冊数	3000冊	3020冊
⑧ 学校説明会等参加人数 (中学生・保護者合計)	2000名	2800名
⑨ 入学者選抜応募倍率 ア 推薦入学 イ 学力検査	ア 3.30倍 イ 1.50倍	ア 2.11倍 イ 1.16倍
⑩ 農業科・家庭科 地域連携活動回数	30回	30回
⑪ 学校満足度(肯定的回答) ア 生徒 イ 保護者	ア 100% イ 100%	ア 87% イ 96%